

知的障害養護学校の日常場面での PECS 指導

休憩時間の機会利用型指導法で指導することは可能か

Communication Training the Picture Exchange Communication System (PECS) to use incidental teaching

○ 由谷み子

渡部匡隆

YUTANI Rumiko

WTANABE Masataka

(神奈川県立相模原養護学校) (横浜国立大学)

Sagamihara School for Mentally Retarded Faculty of Education and Human Sciences, Yokohama national University

KEY WORDS: PECS 自閉症 知的障害養護学校

I. 問題の所在と目的

PECS は、対象児自身が「欲しい」ものをカードと交換する方法で、強い動機付けがあり日常生活にすぐ生かすことができる。しかし開始時期は、児童 1 人に対して 2 人の指導者が集中指導する方法がとられている。養護学校の実践では通常の指導体制では難しい。他の児童が常にいること、衛生管理上、食物を好子とした指導には困難がある。そこで本研究では学校の休憩時間に、好きなおもちゃを写真カードと選択できるようになることを目標に、機会利用型指導でどこまで効果があるか検証した。

II. 方法

1. 対象児

A 児は小学部 1 年(7 歳)の重度の知的障害で自閉症、KIDS で発達年齢 1:2 であった。発語はなく、ADL 全般に補助が必要で、偏食で給食は食べなかった。不快なことがあると泣いて訴えた。好きな遊びは家庭での多様なゲーム機等の操作であった。兄の操作を観察してレーシングゲーム等を習得し、携帯電話の操作など普段の生活からは考えにくいほどの習熟ぶりであった。泣くことが多く、要求は抱っこ程度で休憩時間を寝て過ごしていた。3 ヶ月ほどたつて音楽の流れるキーボードのおもちゃが気に入ってからは、クレーンでの要求行動が増えた。

2. 指導期間

200X 年 9 月 25 日から約 1 ヶ月間であった。

3. 指導環境

担当教師 X、Y の 2 人で指導を行い、教室で他児童 2 人がある状態で行った。休憩時間を利用し 1 日合計 40 分程度指導した。A 児以外の 2 人の児童は知的障害で 2 歳半程度の理解表出があった。他の児童は A 児のために作成した写真カード自体をおもちゃにする、おもちゃを持つていく等、統制の取れた状況ではなかった。A 児の使いたいおもちゃは 2 種類のキーボード型のおもちゃだが、好きな方があり、他の児童が取ってしまうので、もう 1 つを使うことがあった。

おもちゃ置き場をロッカーの上にして、見えていて手が届かないようにした。すぐ脇の壁にマグネット式にしたおもちゃの写真カード 6 種類を貼り付けた。はじめから 6 種類にしたのは、他の児童がカード自体をおもちゃとして欲しがることが想定されたこと、他の児童も写真カードを使う事で要求がより円滑になることも考えられたからである。

4. 指導方法

A 児の好きなおもちゃの写真カードは、おもちゃの置いてあるロッカーの横の壁にマグネットで貼った。A 児が教師 X の手を取ってクレーンで要求をした場合、クレーンをされた教師 X は写真カードをの位置を指差しながらカードを取って渡し、もう 1 人の教師 Y に渡すようプロンプトした。写真カードを受け取った教師 Y は、「〇〇が欲しいのね。」といいながら、A 児に渡すことを繰り返した。教師の役割は固定せず、クレーンをされた教師がプロンプトを担

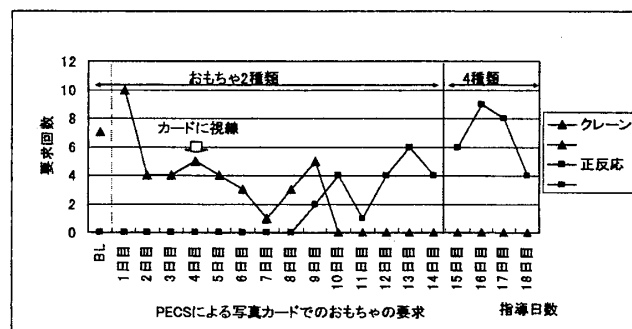
当し、もう 1 人の教師がおもちゃを手渡すようにした。A 児がおもちゃから離れる、遊ぶのをやめた場合速やかに戻すようにした。

III. 結果

ベースラインとして 1 日のクレーンの要求回数を数えたところ 7 回であった。次の日から、写真カードを用いて指導を行った。事前に写真カードとおもちゃを見せて交換のやり方を示したが、クレーンで要求してきたので教師 2 人でその都度プロンプトを行った。指導 4 日目からクレーンで要求をしながらも、時々写真カードに視線が向くことが確認できた。

指導 10 日目に自分から写真カードを教師に渡すことができるようになり、11 日目からはクレーンでの要求がなくなり、写真カードとおもちゃを交換できるようになった。指導のはじめの段階から 6 種類のカードが同時に提示してあったが、カード選択に誤りはなかった。5 日間安定してカードによる要求ができるようになった。

そこで 15 日目から、好きな音の出るおもちゃを 4 種類に増やしたが、その中から選ぶようになった。18 日目からは、同時に 2 種類の写真カードを教師に手渡して要求するようになった。その後も複数のおもちゃを要求する、おもちゃの空き状況を見て要求するなど安定してカードでの要求行動が見られた。いっきにフェイズⅢまでを獲得した。また、補助に来た担当以外の教師や実習学生にも、担当教師と同じようにカードを渡して要求していた。



IV. 考察

結果から、PECS は機会利用型指導法でも指導が可能であると考えられる。その条件としては、児童が欲しいものを教室に置いておくことができ、他の児童との兼ね合いなどで問題がないことが必要である。養護学校はチームティーチングで、指導者が複数いることから、日常生活の休憩時間などで PECS の実践は可能である。養護学校には重度の知的障害を持つ児童が多く、学級経営と指導の個別化には工夫が必要である。機会利用型で実践が可能なが確認できたので、個に応じたコミュニケーション指導として有効であると考えられる。さらに、PECS という段階的な指導マニュアルがあれば、長期にわたってのコミュニケーション指導を継続していく上で有効であると考えられる。